

『甘えの構造』から見る「うらみ」

岸本 崇

エーリッヒ・フロムは『自由からの逃走』において、孤独と無力感に耐えることができず「魔術的助け手 (magic helper)」と呼ばれる外的な力へと依存する人々の姿を描いている。「魔術的助け手」は、神や一つの原理として考えられることもあるが、「恋に落ちた」という現象によくみられるとフロムが言うように、両親・夫・妻・恋人・目上の者といった現実の人間にその役割が付与されることもよくある。依存する人々は、「魔術的助け手」がかれらのことを「保護し、助け、発展させ、かれらとともにあり、かれらを孤独にしないような働き」をしてくれることを期待し、そして自身のあらゆる行動・思想・感情について「魔術的助け手」がどう思うだろうかと気にするようになる。しかし依存者は同時に無意識的に、「魔術的助け手」に服従しているという弱小感と束縛感と、そこから由来する「魔術的助け手」への反抗心をも抱く。「安全と幸福とを託しているその人間にたいする反抗は、新しい矛盾をひき起こす。この新しい矛盾は、

「かれ(引用者注：魔術的助け手)を失うまいとすれば、抑圧しなければならぬ。しかし底にひそむ敵対感⁽¹⁾は、この関係のなかで求めようとしている安全感を、たえずおびやかしている」。だがどんな現実の人間も、依存者の自分勝手⁽²⁾で幻想的な期待になど応えてやることはできない。こうしていつの日か、依存者は「魔術的助け手」への失望を味わい、抑圧していた反抗心を爆発させることとなるのである。

フロム自身はここで「うらみ」という単語を用いていないが、上述したこの依存と反抗心の関係は、まさに「うらみ」の典型的な形成過程だと言ってよいだろう。うらみを抱く者はただ憎悪や敵意のみを他者に向けているのではなく、じつは人一倍つながりを、甘えうることを欲しているのである。

本論文では、一節で『甘えの構造』に沿って「うらみ」と「甘え」の関係を確認し、二節でうらみの現象の仕方を考察し、三節で他者をうらまない在り方がいかに可能かを探るこ

ととする。

一・

『甘えの構造』を著した土居健郎は、その著書の中で「うらみ」を「甘えられない心理」に関するものとしてとりあげ、「うらむのは甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けることであるが、この敵意は憎むという場合よりも、もつと纏綿としたところがあり、それだけ密接に甘えの心理に密着している」と述べる。甘えの心理とはいかなるものなのか。発達段階でみると「甘え」が最初に現れるのは、乳児とその母親との関係においてである。だが、生まれてすぐの乳児の仕草に対して「甘える」という言葉はまだ用いられない。なぜなら生まれたての乳児の精神は胎児の延長上にあり、母子未分化の状態にあるからである。これが生後一年の後半になつて物心がつくと、乳児は母親が自分とは別の存在であることを知覚し、母親を求めるような仕草をするようになる。このようになって初めて「この子は甘えている」と言われるのである。

この「甘え」の原型を確認した上で土居は「甘える」ということは結局母子の分離の事実を心理的に否定しようとするものであるといえないだろうか。【…中略…】この意味での甘

えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることであると定義することができるのである。したがって甘えの心理が優勢である場合は逆に、その蔭に分離についての葛藤と不安が隠されている」と述べる。このように聞くとまるで甘えは、「母子分離の否定」という非現実的な欲求をしているかのようにも思えるが、そうではない。土居によれば、甘えの根底にあるこの依存欲求は人類に普遍的に存在している本能的なものであり、甘えなくしてはそもそも母子関係が成立せず、成人後に新しい人間関係が成立する際にもその端緒においては甘えの発動があり、健全な生活において甘えは必要不可欠なものなのである。

ただ、「分離についての葛藤と不安」を秘めているために、不安定であり傷つきやすいという点が甘えの問題点なのだ。甘えの欲求が満足するかどうか、言い換えれば甘えがその対象となる相手によつて受け入れられるかどうかは相手次第であり、もしも甘えが拒絶されれば怒りなどのマイナス感情が湧き上がることになる。よつて、「甘えはいわば初めから、一見その反対のもの、すなわち恨みに転換するように運命づけられているといえる」。この転換は一方的なものではなく、「甘え」と「うらみ」は表裏一体として存在しており、典型的な「両価感情（アンビバレンス）」なのである。

二・

以上の「甘え」と「うらみ」は同時存在しているアンビバレントな関係にあるということを前提とした上で構築された、郷古英男と山野保による「うらみ」研究を概観していきたい。

最初にうらみの定義について確認しよう。郷古はうらみの最も本質的な要素として次の三つを挙げる。それは「(一)相手の仕打ちに不満をもつ(他人の仕打ちを不当と思う)」、「(二)表立ってやり返せない(仕返しできない)」、「(三)その相手の気持ちや推量できず、いつまでも執着し、じっと相手の本心や出方をうかがう(忘れずに心にかける)」の三つである。これら三つの要素に表されているのは、受動的で攻撃的な、そのままでは内にこもる感情である。そして、うらみという心理的過程は「(四)仕返しをする、報復する」という行動が加わることによって完成しなければ、精神的破綻を招く危険を持つているのだと郷古は指摘する。

山野も「他者から受けた仕打ちを不当と思い、不快感を抱きながらも、相手の実力や本心や出方が推測できないため、強い報復欲求を抑制し、いつまでもそれに執着しながら辛抱し続ける苦しさを基調として発現する感情もしくは情念」と

いう郷古とほぼ同様の定義を掲げる。だが一方、「(四)仕返しをする、報復する」ことによってうらみの心理的過程が「完成する」⁽⁸⁾。「うらみが晴れる」という解釈に対しては批判の目を向けている。山野は、うらみの根底には「甘え」という対象とのかかわりあいの欲求が秘められているのだから、「真に「うらみ」が晴れるとは、一体感の回復が達成されることにほかならない」⁽⁹⁾ことを繰り返し強調する。山野によれば、「うらみ」による殺傷などといった直接的な攻撃は、自己統御能力の弱さから生じた短絡的反応に過ぎず、もしもそのような報復行動で気が晴れるとしたら、それは「うらみ」と近縁にある別の感情なのである。

さて、うらみの要素の内的問題として取り上げたいのは、「表立ってやり返せない」のは何故かということである。もしも相手の仕打ちに対して、表立ってやり返す⁽¹⁰⁾対立することができていたとしたら、そもそも「いつまでも執着する」「相手の本心をうかがう」「辛抱し続ける」といった状態には至らなかつたはずなのだ。

まず一つ目の理由は、先に挙げたように「報復する」ことが「うらみ」の一番の目的ではないから、言い替えれば「甘えたい」からである。うらみを抱く人がそもそも何を求めていたかという点と相手に自分を受け入れてもらうことである。

そこで自分を拒絶する相手に対して「なぜ認めてくれないんだ！」とくつてかかつて、余計に嫌われるだけである。拒絶されたことについての不満をぶつけるという行為自体が「甘えたい」という目的に対して全く逆効果なのである。報復することによって、自分と相手の関係が断絶してしまうことほど恐ろしいことはない。だからこそ「拒絶された」という不満を抱えつつ抑え込みながら、これ以上嫌われまいと相手に忍従する（悲しいことにそれもたいがいの場合逆効果だろう）。こうして自ら選択した奴隷化は、うらみをさらに強化していくことになる。

二つ目に考えられる理由はプライドが高いために、自分のうらみを人に知られたくない、あるいは自分自身のうらみを認めたくないからである。山野によれば、「うらみ」を抱く人は必ずそれを隠したが¹⁰るのであり、うらみを表明するのは、そのうらみが社会的に容認される正当性を持ちうる場合か、被害者意識が異常に高揚している場合に限られるとされる。当然ながら「うらみ」は基本的にはよくないものとされているため、そのような感情を自分が抱いているなどと周りに思われたくも自分で思いたくもないのである。またうらみの対象となる相手と自分との間に、加害者／被害者、強者／弱者、上／下という関係が成立してしまっていることを直視したくないというのも、うらみを認めがたい理由の一つであ

る。山野は、いじめと「うらみ」の関係について、いじめを苦にして自殺をした子の遺書において激しい怨念が書き記された例は極めて稀であることを報告した上で「いじめっ子と対等である自分を、錯覚的にせよ保持したいという欲望によって、なまなましい怨念を意識化できなくなっているのではなかろうか¹¹」と推察している。うらみを抱く人は弱気で受け身の傾向にあるが、同時に、弱者としての自分を認められないプライドの高さと、弱者である自分への自己嫌悪を保持していると言えるだろう。

三つ目の理由は、相手が強大で返り討ちにされるだろうという恐れが強いからである。この場合の「強い」とはどういうことだろうか。身体的な力関係において負けていて暴力を受けざるを得ないということもありえないだろうが、多くは人間関係・社会的立場における強弱ということになる。先の内容とも重複することになるが、このような世間的な強弱関係はどちらに正当性があるかという問題に言いかえられうる。報復に移ることが可能となるのは、自分は被害者で、相手が加害者であり、正義が自分の側にあるとなつて初めてのことなのである。うらみを持つ人は自分の感情が「私怨である」「逆恨みである」という個人的な事情として相手にされないことを恐れているのだ。

「辛抱の理由はいろいろあるが、辛抱の原因というよりは

辛抱の辛さを自分に納得させる理由になっっていることが少なくない。「うらみ」は本来、弱者が抱きやすい感情だからである^②と山野は述べる。うらみを抱きやすい人は、受け身的で、人からの承認を求める欲求が強く、拒絶されることを恐れる弱者であると言うことができる。すると「うらみ」が生まれる直接の原因であった「不当な仕打ち」とはどのようなものを指していたのかという疑問がわいてくる。客観的な視点から「不当な仕打ち」と言えば「不公平」「不平等」や「不正」「不道德」なものであろう。しかし、うらみを抱く人々が執着することとなる「不当な仕打ち」とは、「期待できると当てにしていた甘えの欲求に対する拒絶」のことであると言えないだろうか。だとすれば、そもそも「不当な仕打ち」を受けたと感じること自体が、被害者意識からくる事実に反した妄想であるとするらいえるかもしれない。

ここで被害者意識について検討しておきたい。

土居はかつての学生運動の活動家たちの中に被害者意識を見出し、「甘え」と関連付けて考察している。「私が一番関心をもったのは、全共闘の学生たちが加害者として行動しているながら、その行為の被害者たち自身にしばしば加害者意識を呼び醒ます不思議な現象のことであった。私はこの現象を考へているうちに、これは彼らが究極的には被害者の立場に身

をおいているからだということに思い至った。【…中略…】被害者意識を持つ人間はただ個人的に被害感を持つばかりでなく、被圧迫民族・困窮者・精神病患者など被害者一般と同一化している。彼らはまさに甘えられないから被害者なのであるが、それでいて被害者としての立場に甘えているといえる^③」。当時のニュー・レフトの活動家たちは、自分たちを含めたブルジョアの生活を送る現代人に対する否定を主張していた。すなわち自身の加害者性を自覚し、自らの特権的階級を解体しなければならぬと考えていた。しかし彼らは自己の特権を否定することと同時に、自身を被害者と同じ立場に置いてしまう。そして他の「加害者」を敵として積極的に攻撃するようになるのである。

このような光景はけっして一時代に特別なものではない。例えば昨今のネット上で頻繁に見られる「炎上」も同じ構造を持つていると言えるだろう。「炎上」とは、著名人や政治家が何らかの不祥事を起こした場合や、ある特定の属性を持つ人々に対して差別的と捉えられうる発言をした場合に、非難・批判が殺到することである。批判を行っている人々は、ときに過剰とも思われるほどの攻撃を浴びせながら、自身の行為が正義であることを疑わない。

土居は次のように言う。「このような被害者意識は、二重に屈折した甘えの心理を秘めていると見ることができると

三.

いうのはもともと被害的心理が先にのべたように甘えの不満に由来していることにかけて加えて、この場合は、それが意図的に連帯故に選り取られているからである。被害的心理自体は苦痛なものであるが、連帯故に主体的に選り取られた被害者意識は苦痛を感じさせることが少ない。かくしてかかる被害者意識の持主は、サディスティックな自己満足すら覚えるほどになる⁽¹⁴⁾。人により事情は異なれど、甘えをかなえられ

ず不満と孤立感を抱えて生きている人々が多い。彼らの中に溜まった行き場のないうらみは、「加害者Ⅱ社会的悪」という仮想敵を得ることによって、「正当」な怒りとして放出される。彼らは正義の市民の一員であるという連帯感を得ることができ、それによって孤立感は一時的に解消され、彼ら自身の暴力性・加害者性は覆い隠されることとなる。

土居は「彼らは被害者意識に甘える加害者としてではなく、むしろ加害者意識に悩む主体的人間として生まれ変わらなければならないのである」と批判している。「加害者意識に悩む」ことが必要であるかは議論の余地があり、論者はむしろ「加害者と被害者」という二項対立構造自体の乗り越えが目指されるべきであると考えるが、どちらにせよ、自らを「被害者Ⅱ正当」の立場に置くという態度は改めねばならないものであろう。

さて、ここからはうらみをいかにして解消すればいいのかについて考えたい。

先述した通り、山野は著書の中で真に「うらみが晴れる」ためには一体感の回復が達成される必要があるとしており、例えば夫婦間のトラブルにおいて夫の心からの謝罪によって、うらみを抱いていた妻の気持ちが満たされ、うらみが解消したという事例を挙げている。だが山野自身も断っている通り、そのように紛争の解決とうらみの解消が直接つながっていれば話は簡単だが、現実にはそううまくはいかない。それではうらみが解消するか否かがあまりにも他者依存的であり、パーソナルな関係がなくなつたあと、あるいはもともとなかつた場合には謝罪をもらうことなど不可能である。またもしも、そもそもうらみが被害者の妄想に端を発していた場合には、謝罪を要求すること自体に正当性がない。

うらみを解消するための援助として、山野は当然ながらカウンセリングを挙げている。このカウンセリングにおいては、うらみの内に秘めている甘えをカウンセラーにぶつけることができるかが成否を分ける。ただし甘えをぶつけると言っても、それはベタベタと甘える関係になることを指すのでは勿論なく、むしろ逆にカウンセラーをうらみの対象の代

わりとして非難や抵抗をすることを指している。クライアーントは抑圧していたらみⅡ甘えを吐き出すことによつて「受容され理解された」と感じられるようになり、「本来の自浄能力（現実検討能力、衝動性や情緒の刺激の統御能力、他者への共感性、新しい別の価値の発見などにより「うらみ」を浄化解消していく能力）」を回復するきっかけを得るのである。この自浄能力を発揮することができるようになれば「甘えを諦めたり克服する」ことが可能となつて、自身の「うらみ」の正体に気づき「うらみ」は解消されるだろうと山野は述べている。

だがしかし「甘え」は克服するべきものだろうか。甘えを断ち、独立して生きられるようになることこそが理想的なのだろうか。導入に挙げたフロムにおいても、依存的な「求める愛」とそれに対する「与える愛」という区別がなされ、前者は否定的にのみ捉えられる。だがしかし土居は「フロムの立場は求める愛を軽視し、与える愛を讃えるという現代の傾向を示す例となつている」と批判し、甘えがただ単純に「よくないもの」として受け取られることに対しては、一貫して異を唱えているのである。「甘え」が病的心理や社会不安の基礎にあるといつても、もともと「甘え」自体が悪いためだとは考えないでほしい。むしろ「甘え」はそれなくし

ては精神が成長しないぐらい重要な心の働きである。しかし「甘え」が何らかの理由により否認され、あるいは意識下に抑圧された場合には害をなすであろう」と土居は言う。

『甘え』の構造の執筆当初、土居は甘えの果たす役割を明確に定義せずにいたが、読者からの「甘えをよいものとして捉えているのか悪いものとして捉えているのか分からない」という疑問が絶えなかつたために、のちに敢えて「よい甘え」と「悪い甘え」を分けて定義することに至つた。

結論を先取りして述べてしまえば、「悪い甘え」とはこれまで見てきた「うらみとアンビバレントな関係にある甘え」のことであり、山野が克服するよう述べていたのもこれである。この甘えは「自己愛的な甘え」であるとも言われるが、「自己愛的」とは「計算高く自己の利益を図ること」ではなく、そのような場合は自己中心的／利己的という方がふさわしいとして区別されている。土居は「自己愛的な甘え」について「ある種の損得勘定に支配されていることに間違いはないが、同時に思うに任せない気持ちや底流にあるように見てとれる」と述べ、「一種の精神的弱み」「一種の欠乏状態」を示しているとする。うらみを抱く人は、他者からの承認に飢え、それ故に他者から受け入れてもらえようと振舞うが、承認がもらえなければ「不当だ」と叫んでいた。うらみを持つ人にとっては、承認が与えられてこそ正当な処遇なの

である。まさに「自己愛的甘えは一方的でしばしば要求がましいのが特徴的」⁽²⁰⁾なのである。

では「よい甘え」とはどのような人間関係なのか。それは「相互の信頼を基礎とした甘え」であると土居は言う。「信頼は相互的であり、実際また相互的であるということが信頼の本質である。健康な甘えというものはこのような相互的な信頼に根ざして維持されると言つてよい。信頼の基礎のない甘えはいわば浮き草のように頼りなく、気まぐれなものとなる。というのはいつ甘えられなくなるかわからないし、いったん甘えられないとなると、果たしてまたいつ甘えられるようになるかわからない。子供はこのような状況において「うらむ」という心情を体験するだろう。うらむのは甘えられないということであらうのである。言い替えば信頼に根ざしていない甘えはうらみに変わりやすく、甘えとうらみは縊り合された糸のごとく同時に存在する⁽²¹⁾」。うらみを抱く人に欠けていたものとは「信頼」⁽²²⁾だったのだ。彼らは、人からいつ見捨てられてしまうか、嫌われてしまうかを恐れていた。相手が自分を受け入れてくれるということを、到底信じる事ができなかった。故に彼らは受け身の無力感と孤独感に苛まれていたのだ。人を信頼し健全に甘えることができるならば、当然ながら孤独感はなく、自身の力を越える物事に対しても他者の力を頼ることができるとともに無力感はなく、故に

主体的に活動することもできるのだ。

ただしここで注意しておきたい点は、お互いの密接な関係性において成り立っている甘えは、一見相互的信頼のように見えるがまったく別種のものであるということである。土居は、このような関係を自己愛的な甘えの特例として「甘やかし」と「甘ったれ」の「馴れ合い」と呼んでいる。どういうことか。信頼によつて成り立つ本来の甘えは、自然発生的であり非言語的・非反省的であるとされ、お互いに「甘やかそう」「甘えよう」などという意識は働いていない。一方で、「甘やかし」は甘やかすことによつて相手が喜ぶだろうことをわかつてやっているのである。ゆえに「それは偽つて相手の機嫌を取ることであり、おもねりやへつらい、もつと下品な言葉でいえば胡麻すりに通ずる⁽²³⁾」と痛烈に批判される。また「甘やかし」を受け入れてもらおうとするという点において、甘やかす側も甘えていると言つことができる。そしてこの「甘やかし」の誘いに応じる「甘ったれ」の側も、自分が甘えることで相手が喜ぶことをわかつて甘えるのである。これはまさに共依存的な関係であらう。こうした人々は互いに親しんでいるように見せながら、結局は自分の都合しか考えていないのだ。

「甘ったれ」は相手が甘やかしてくれることを期待してい

る。言いかえると、甘えることが許される関係を求めているのだ。土居は言う。「常に相手の側からの促しを期待する」というのでは本来の甘えとは言えない。すなわち甘えは必ずしも受身的姿勢を意味しないのだ。【…中略…】むしろ「甘え」の本質は素朴な自発的甘えにこそあるというべきである^②（傍点引用者）。既に述べてきた通り、甘えが受け入れられるどうかは相手次第であり、それゆえに不安定で傷つきやすい。だがしかし、傷つく危険性のない甘え甘やかされることが促され許されるといって受身的関係をもととするならば、それは一方的な要求でしかない。信頼に基づく自然発生的な甘えは、「許されるから」という保証を得た上で甘えるわけではないという点において自発的なのである。

これまでの論をふまえ、うらみの根本的な克服について考えよう。うらみが解消されるためには、甘えの欲求が満たされること、すなわち「一体感の回復」が必要である。しかし甘えの欲求が受け入れられるかどうかは相手次第であり、そもそもこの不安定さこそが甘えとうらみが表裏一体である所以であった。この「相手に受け入れてもらえないかもしれない」という不安が示しているのは「信頼」の欠如である。「甘やかし」と「甘ったれ」が、相手が喜ぶように機嫌を取るのも「そうしなければ受け入れてもらえない」という信頼の欠

如した思い込みが原因なのである。うらみに転じやすいこういった「悪い甘え」の克服のためには「信頼」を持つことが必要なのは間違いない。

だが、この「信頼」とは、土居の言うように特定の誰かとの間に成り立つ「相互的信頼」なのであろうか。もしも「相互的」であることが「信頼」の本質であるとしたら、結局「信頼」が成り立つかどうかは相手次第ということになってしまわないだろうか。

信頼は、実際に「相手が受け入れてくれるかどうか」とは無関係に、主観的に一方的に抱くことができるものであると論者は考える。むしろこれまで論じてきた「相手に受け入れてもらえないかもしれない」という信頼の欠如も、その根底にあるのは「自分なんて受け入れてもらえないだろう」という自分自身への信頼の欠如であると言っても過言ではないだろう。自分で自分自身を受け入れてあげられるなら、現象として特定の誰かが「受け入れてくれなかった」としても、自分の存在は揺るがない。受け入れてくれなくても大丈夫なのだから、受け入れてくれないことをうらむことはない。こうした信頼は、特定の誰かとではなく、自分自身との、あるいは大げさに言えば世界との「一体感の回復」とも言えるだろう。

脳性麻痺の障害を持ち、障害と社会の関係について当事者研究を行っている熊谷晋一郎は「自立とは依存先を増やすこと」だと言っている。甘えられる（あるいは甘えたい）対象が特定の人物のみに限られる場合、その対象者からの評価だけに執着することになり、甘えが受け入れられるか、受け入れられずうらむかの二択へと陥りがちになってしまうのだろう。例えばもしも「私は障がい者だから誰にも受け入れてもらえない、家族にしか甘えられない」といった思い込みを持っていたとしたら、何か困ったことがあったとしても誰にも頼ることができず身動きが取れなくなってしまうだろう。

一般的には、自立とは人に依存しないことであると考えられる。だが実際はむしろ逆である。自分自身を受け入れることによつてはじめて、他者を信頼することも可能となり、特定の人に限らず気軽に「甘える」ことができるようになる。これこそが自立した在り方だと言えるのではないだろうか。

注

- (1) Erich Fromm "Escape From Freedom", Avon Books, 1965, p.197 (日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社、一九五二年、一九二頁)
 (2) 同上書、一九九頁(同訳書、一九五頁)
 (3) 土居健郎『甘え』の構造(増補普及版) 弘文堂、二〇〇七年、四七頁

- (4) 同上書、一一八頁
 (5) 土居健郎『土居健郎選集(二)「甘え」理論の展開』岩波書店、二〇〇〇年、八三頁
 (6) 郷古英男『うらみ』の心理 大日本図書、一九七八年、三〇頁
 (7) 山野保『うらみ』の心理 その洞察と解消のために 創元社、一九八九年、七四頁
 (8) 同上書、九七頁参照
 (9) 同上書、一六頁
 (10) 同上書、一一〇頁
 (11) 同上書、一一六頁
 (12) 同上書、七三頁
 (13) 土居健郎『甘え』の構造(増補普及版) 三七―三八頁
 (14) 同上書、二六七頁
 (15) 土居健郎『甘え』雑稿 弘文堂、一九七五年、一一六頁
 (16) 山野保『うらみ』の心理 その洞察と解消のために 一三三頁
 (17) 土居健郎『土居健郎選集(一)「甘え」理論の展開』二九二頁
 (18) 土居健郎『注釈「甘え」の構造』弘文堂、一九九三年、XVI頁
 (19) 土居健郎『続・甘えの構造』弘文堂、二〇〇一年、九八頁
 (20) 同上書、九九頁
 (21) 同上書、九五頁
 (22) 「信頼」の有無が重要であるならばわざわざ「甘え」という曖昧な用語を使わなくてもいいのではないかとという疑問もあるかもしれない。しかし「信頼」と「信頼を基礎とした甘え」には違いがあるのだ。土居は、日本と欧米の夫婦関係を比較し、次のように語っている。「あてにするというのは信頼するということと少し趣きを異にする。信頼(Trust)といえは、西洋の夫婦も当然お互いに信頼

し合うというであろうが、あてにするというのは、英語で trust というよりも take for grantedの方がもっとびったりしている。この成句は、あるものが自分に許されている、あるいは与えられていると見なす意味に使われる。【…中略…】とところで面白いことに西洋の夫婦の間では、お互いを take for granted することがまさに禁忌なのである」（『甘え』雑考』、一三三頁）。そして、日本における夫婦間の甘えとは「あたりまえ」のように「お互いをあてにすることだと述べられる。

- (23) 土居健郎『土居健郎選集（二）「甘え」理論の展開』二八三頁
同上書、二四六―二四七頁

(き)しもと・たかし 筑波大学大学院一貫制博士課程
人文社会科学研究所哲学・思想専攻